

氏 名 ^{ムラツ} ^{ドンダル} MURAT DUNDAR
 学位(専攻分野) 博 士 (工 学)
 学 位 記 番 号 工 博 第 2646 号
 学位授与の日付 平成 18 年 3 月 23 日
 学位授与の要件 学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
 研究科・専攻 工 学 研 究 科 建 築 学 専 攻
 学位論文題目 A STUDY ON BRUNO TAUT'S WAY OF THOUGHT
 (ブルーノ・タウトの思惟方法に関する研究)

論文調査委員 (主 査) 教授 宗 本 順 三 教授 高 松 伸 教授 門 内 輝 行

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、20世紀前半において、伝統と近代についての思索を遂行した建築家ブルーノ・タウト（1880-1938）の断片的な資料（言葉、素描）に基づく、建築創作の思惟方法の精緻な分析であり、建築家としての創造性の理解に新たな解釈を与えた。その内容は2部から構成され、第1部では、来日以前のタウトのいう「集合的態度」および「ガラス建築」の方法概念の分析を通して、第2部では、来日後の伝統的日本建築についての思索の分析を通して、タウトの二項対応の思索の変容の特質を解明している。

第1章では、本研究の目的と研究方法を明らかにし、タウトの来日前と来日後の思索に関する既往研究を検証し、本研究の位置づけを行っている。

第2章では、来日前のタウトのいう「集合的態度」の方法概念が、表現主義やユートピア思想から合理主義への変容であるとして、「物質と精神」「実践目的と美」という二項対応の思惟方法であることを解明した。さらに、対立する二つの概念の統合として、タウトのいう「高次の理念へ向けた建築の目的」である「生」「真実」「住まい」の表現的意味を解明した。同時に、タウトの思索における「建築家」の役割を明らかにした。

第3章では、タウトの表現主義期の「ガラス建築」を動機づける二つの概念を、パウル・シェーアバルトの思想との交流に言及しつつ解明している。すなわち「物質的意味としてのガラスによる光の効果」と「精神的意味としての光と色の統合」があり、さらに後者には、クリスタルの二つの象徴的意味としての「新しい文明」と「ゴシック様式」の二つの表現があることを示し、それらの対比的特質を解明した。

第4章では、タウトによる伝統的日本建築（桂離宮、伊勢神宮、農家）の思索を取り上げ、日本建築における「二項対応の表現」の特質を解明した。本章の構成を、タウトのダイアグラムに描かれた「桂へ至る道程」に基づき三つの節（「表現：対比するものの統一」「簡素：わびさび」「哲学的態度」）に区分して、タウトの日本建築の思索を、三つ対概念（「日常の有用性と哲学的な精神性」「実践目的と美」「清貧と美」）の変容として明らかにし、それらが二項対応の思考であることを解明した。また二項対応の変容の思考が、桂離宮への高い評価に基づいていることを明らかにした。

第5章では、本論文の結論であり、本論文の成果を要約するものである。

本論文は、タウトの来日（1933）以前の思惟方法と来日後の伝統的日本建築についての思惟方法とを比較検討し、タウトの思惟方法の変容の特質を解明している。これまでの近代建築における史学的論考や、文化論的論考を一段と根底的な層において捉え直し、ブルーノ・タウトの二項対応の思惟方法に新たな解釈を与えている。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、ブルーノ・タウト（1880-1938）の断片的な資料（言葉、素描）に基づく、建築創作の思惟方法についての精緻な分析であり、建築家としての創造性の理解に新たな解釈を与えたが、得られた成果は次のとおりである。

1. 来日以前のタウトのいう「集合的態度」の思惟方法を解明した。この方法概念が、表現主義やユートピア思想から合理主義への変容であるとして、「物質と精神」「実践目的と美」という二項対応の思考方法であることを解き明かした。さらに、対立する二つの概念の統合として、タウトのいう「高次の理念に向けた建築の目的」である「生」「真実」「住まい」の表現的意味を解明した。

2. タウトの表現主義期の「ガラス建築」を動機づける二つの概念を解明した。すなわち、物質的意味としての「ガラスによる光の効果」と精神的意味としての「光と色の統合」があり、さらに後者には、クリスタルの象徴的意味としての「新しい文明」と「ゴシック様式」の二つの表現があることを示し、それらの対比的意味を解明した。

3. タウトによる伝統的日本建築（桂離宮、伊勢神宮、農家）の受容には、三つの対概念（「日常的有用性と哲学的精神性」「実践と美」「清貧と美」）があることを二項対応の思考として解明した。

4. タウト来日（1933）以前の思惟方法と来日後の伝統的日本建築に関する思惟方法とを比較して、タウトの思惟方法の変容の特質を解明した。

以上のように、本論文は、これまでの近代建築史における史学的論考や文化的・思潮的論考を、一段と根底的な層において掘り下げた研究として位置づけられており、ブルーノ・タウトの思惟方法を新たに解き明かす論考として、学術上、実際上寄与するところが少なくない。よって、本論文は博士（工学）の学位論文として価値あるものと認める。